

## 嘉靖本以前の『三国志演義』

著者	小松 建男
雑誌名	中国文化：研究と教育
巻	60
ページ	(24) - (34)
発行年	2002-06-29
URL	<a href="http://doi.org/10.15068/00150383">http://doi.org/10.15068/00150383</a>

# 嘉靖本以前の『三国志演義』

小 松 建 男

## I 問題の所在

『三国志演義』は本来どのような姿をしていたのであろうか。我々が手にしうる最も古い版本は、嘉靖元年（1522）刊行の『三国志通俗演義』（嘉靖本）<sup>1)</sup>であるが、作者は羅貫中だと言う説を信ずれば、彼は元末明初の人であるから、嘉靖本まで約150年の時を経ている。しかも嘉靖本は、必ずしもそれ以前の古い『三国志演義』（「古本」）の姿を忠実に伝えているわけではなく、かえって嘉靖本以後の版本に「古本」の姿を見出しうるものが既に指摘されている<sup>2)</sup>。

ただし嘉靖本以後の版本も改訂増補を加えられているので、これによっても「古本」を忠実に復元することはできず、結局いまある『三国志演義』諸本を比較して、その中から「古本」の断片を拾い集めるしかない。

本論では、嘉靖本に割注形式で挿入されている注の一部が、嘉靖本のつぎに古い版本である嘉靖27年（1548）刊行の『三国志演義史伝』<sup>3)</sup>（『史伝』）では本文になっていることを手がかりに、嘉靖本以前の『三国志演義』について考えてみたい。

## II 本文と注の境界

嘉靖本の注について、魏安（West, Andrew Christopher）氏は、『史伝』と比較した結果、嘉靖本には『資治通鑑綱目集覧』を利用して増補した注があること、両者に共通する注は「古本」に遡れることを指摘した<sup>4)</sup>。魏氏は『史伝』が嘉靖本が注としている文を本文にしていること（本文と注の境界が一致しないこと）については、『史伝』が注を誤って本文にしまったと見なし問題にしていけないのであるが<sup>5)</sup>、本文については、嘉靖本以外の版本が「古本」の姿をとどめていることがあるのなら、本文と注の境界も同じことがあり得るのではないのではないだろうか。

たしかに『史伝』の系統のテキストは杜撰なものであるので、『史伝』が注

を本文化してしまったとしか言いようのない例は多いが<sup>9)</sup>、『史伝』が本文にしまっている嘉靖本の注のうち、「原来」で始まる文（「原来」文）、「後來」で始まる文（「後來」文）、「至今」で始まる文（「至今」文）、「此～」で始まる文（「此～」文）の四つの文型は、単に技術的な誤りから『史伝』が本文にしまっていると簡単にかたづけしてしまうことの出来ない問題を含んでいる。

## 1 「原来」文

「原来」文は、今おこっていることの原因を過去に遡って説明したり、今まで知らなかったことに気付いたりしたときに使われる。

「原来」文には、次のように嘉靖本と『史伝』で位置が異なる例があり、どちらかが「原来」文を本来の位置から移動させ注もしくは本文にしていることが分かる。

場面は、馬超の武将龐徳が計略によって城を奪った箇所。どのような計略であったかが「原来」文で説明されている（12-38a、667）。嘉靖本は、龐徳が突然あらわれたところで、これは彼の計略であったと説明しているのに対し、『史伝』は、この作戦が成功し論功行賞を行った後で説明がなされている<sup>7)</sup>。引用に当たっては、嘉靖本の本文をa、『史伝』の本文をbとし、割注になっている箇所は【 】でくり、問題としている文には下線を引いてある。

1 a 鐘進急來救時、城邊轉過一人舉刀縱馬道：“龐徳在此。”立斬鐘進於馬下。【原来龐徳獻計、……入城内應】徳引十餘勇士殺散軍校。……馬超韓遂得了城池、賞勞三軍。却說鐘繇退守潼關……

1 b 鐘進急來救時、城邊轉過一人手持大刀大叫：“龐徳在此。”手起斬鐘進於門下。隨後十餘勇士殺散軍校。……馬超韓遂却得了城子、重賞各軍。元來是龐徳獻的計、……打關入城裏應外合。却說鐘繇退守潼關……

実は「原来」文は、『三国志演義』の中で比較的よく見かける表現であり、嘉靖本でもそのうち八例が注になっているにすぎない（『史伝』は全て本文<sup>8)</sup>）。しかもその八例の中には、次の例2のように本文を注にしようとする無理をしたために発生したと思われるおかしな注もあるので、「原来」文については、嘉靖本が注にしまっても文章が成り立つと判断したものを本文から注に移したと考えられる。

2 a 但見張飛端坐不動。張郃驟馬到面前、一鎗刺倒。【原來是個草人身上披張飛甲頭上帶盔伏於桌上。張郃刺倒】見是箇草人、急勒馬回帳。

2 b 但見張飛端坐不動。張郃驟馬到跟前、一鎗刺倒。原來是個草人身上披張

飛甲頭上盛伏於草身上。張郃刺間、見是箇草人、急勒馬回帳。

これは張郃が張飛の陣に攻撃を仕掛けた場面（14-68a、832）。注意して読んでみると、嘉靖本の注はおかしい。「張郃刺倒」（『史伝』が「張郃刺間」となっているのは誤りであろう）は、これだけでは注として何を言いたいのか分からない不自然な文である。むしろその後の本文「見是箇草人」とつなげて読んで始めて意味が通ずる。

ところが、「張郃刺倒」を本文にしてみても、「原來是個草人身上披張飛甲頭上帶盛伏於卓上」を注として残すと、ここは「張郃驟馬到面前、一鎗刺倒。張郃刺倒見是箇草人」となってしまう、注の直前にある「一鎗刺倒」と内容が重複してしまう。これを「原来」文まで本文として扱えば、「張郃は一槍に（張飛を）突き刺しましたが」述べて、張飛が殺されたのかと読者を驚かせたところで、語り手が「なんとそれはわら人形に兜鎧をつけたものでありました」と種明かしをし、読者が安心したところでもう一度「張郃は突き刺したのがわら人形と見るや……」と前段とすこし話を重ねて再開した考えることができず自然さはなくなる<sup>9)</sup>。

嘉靖本が本文からなるべく「原来」文を取り除こうとしたのは、「原来」文をなるべく避けようという意志が働いていたためと思われる。

たとえば有名な「断橋」の場面（9-13a、444）を挙げてみよう。嘉靖本の二つ目の注「此橋皆是木橋、非石橋」は、『史伝』で対応する本文を探すと「原来只是木橋」と「原来」文である。嘉靖本は注とは言え「原来」文が近くに二つ並ぶことを嫌ったものと思われる。

3 a 只有二十騎跟去。其餘都跟玄德去了。【原來張飛常要鞭撻、軍士願跟者少】張飛引二十餘騎同至長坂橋【此橋皆是木橋、非石橋】張飛回看、

3 b 只有二十騎隨着。餘者跟玄德。元來張飛常鞭打、軍兵願跟者少。張飛引二十騎同至長坂橋、原來只是木橋橋。飛乃回看、

また、次の例では嘉靖本から「原来」文そのものが書き直しによってなくなっている。

4 a 忽山路一軍出。玄德馬上叫苦曰：“前有伏兵、後有追兵。天亡我也”迎近前去、當頭一員大將乃燕人張飛；正從那條路上來、望見塵埃起、知與川兵交戰。張飛當先而來。

4 b 忽山路一軍突出。玄德馬上叫苦：“前有伏兵、後有追軍。天亡我也”向前去時、當先一人飛轉而來、乃燕人張翼也。元來張飛嚴顏正從那條路殺來。當日却望見塵埃起、知是與川將交兵。飛當先而來。

これは劉備が前後に敵をうけ絶体絶命と危機感をもちあげた後、実は前から来たのは張飛の軍だったと読者を安心させる場面（13-51a、740）。このように突然人が立ち現れるとき、4bのように「乃……也」と紹介するのは『三国志演義』によくある表現であり、4aの様な言い回しは見かけない。嘉靖本はこの紹介の表現を崩し、張飛達がここにあらわれた理由を説明した文を、張飛の行動の叙述に転化したため、ぎこちない文になっている<sup>10)</sup>。

## 2「後來」文

嘉靖本では、未来の出来事に言及するとき、注で「後來」文をよく使う。一方『史伝』の「後來」文は、三例が注、その他の十一例は皆本文である。

『史伝』が注にしている「後來」文は、みな今述べていることが後の出来事の呼応することを指摘したものである<sup>11)</sup>。

たとえば、曹操が于禁を高く評価した場面（8-65b、420）。嘉靖本と『史伝』ともに「後來」文の注を挿入し、これがのちに于禁が関羽との戦で多くの兵士を失う遠因と論評している。

5 a 操曰：“文則固如此高才、堪任大將軍矣。”【後來水滄七軍折去許多人馬因此起也】遂厚賞之。

5 b 操曰：“文則固如此高才、堪任大將軍矣。”【後來水淹軍軍折了許多軍兵因此誤】遂厚賞之。

一方『史伝』が本文にしている「後來」文のうち八例は、その後もはや登場するほどの話を持たぬ人物について、ことのついでに最後を述べておくというもの。

次の例は、孫策に破れた二人の武將の末路である（3-81a、239）。

6 a 劉繇笮融走豫章投劉表【後在山林之中爲落草寇一般、劫掠財物被居民所殺。】孫策還兵復攻秣陵。

6 b 劉繇笮融去投拜劉表。後皆在山中劫掠被鄉民所殺。孫策還兵復攻秣陵。

他の三例は、初めて登場した人物について、彼らがその後曹操の配下として再登場し活躍することを予告したものの。

次は賈詡が初めて登場したところ（2-67b、155）。この箇所は両者で若干文字も異なる。

7 a 詡、字文和、武威姑藏人也。【後為魏臣】

7 b 翊、字文和、武威姑藏人也。後來是魏臣

また嘉靖本と『史伝』で位置が異なる例も一つある。曹操が、陳宮を処刑し

た後彼の家族を厚遇したと言う後日談(4-70a、311)。これは注であるなら、8aの位置がふさわしく、本文なら8bの位置がふさわしい。注もしくは本文に移行させる際に位置も適切な位置に置き直したものといえる。

8a 操與從者曰：“……”【後曹公……待之甚厚。此乃曹公之德也。】宮聞不言、……遷葬許都。史宮有廟祠贊曰：

……

操送下樓、……

8b 操謂從者曰：“……”宮聞不言、……遷葬許都。史宮有廟祠贊云：

……

後曹公……待之甚厚。此好處是曹公德也。操送、……

また嘉靖本には、「後來」文ではないが、出来事を述べる位置を『史伝』より後にずらしている例がある。

一つは、李厳と廖立の話で、『史伝』では、李厳が孔明を讒言して左遷された箇所(21-18b、1291)で、孔明が死んだとき彼が嘆き悲しんだことにふれ、その後に類話として廖立の話も挙げている。嘉靖本は、これを李厳の話に注に移し、廖立の話は孔明が死んだ箇所(21-63ab、1330)に移している<sup>12)</sup>。

また張苞の死について、彼が怪我をして戦線を離脱するときに、『史伝』は先に結果を述べている(20-49a、1249)。

9a 孔明送回成都養病。

10a 孔明交送回成都養病。患破傷風身死。救葬於成都。後主封張苞弟張昭爲待中郎【此是後話】

嘉靖本はこれを標引の死亡を伝える箇所に移している(20-58a、1256)。

9b 有人自成都而來、説：“張苞破傷風身故。救葬於錦屏山。”【後主後封張苞弟張昭爲待中】

10b 忽有人自成都而來、説：“張苞破傷風而死”

これらを見ると、嘉靖本は未来の事柄を事前に述べることを好まなかったらしく、「原来」文の時と同じように、「後來」文も嘉靖本が本文からはずしたと考えるべきであろう。

### 3 「至今」文と「此～」文

次に「至今」文と「此～」文について。

まず「至今」文は、今(語り手もしくは読者の今)に至るまで名所旧跡が残っている、話が伝わっていることを述べ、詩+「至今」文または「至今」文+

詩のように詩とともに使われる。

嘉靖本に「至今」文は五例あり、詩+「至今」文となっているのは、三例、「至今」文+詩は、二例ある。

一方『史伝』は、「至今」文が一例多く合計六例。詩+「至今」文は本文が二例、本文より一字下げてはじまり、「至今」文が終わると改行して本文との間に区別があるもの（低記）が二例である。「至今」文+詩は二例、「至今」文+詩に類似のものが三例である。

「至今」文の位置と、注と本文の違いについて、詩+「至今」文を表1と表2、「至今」文+詩を表3と表4に示す。なお低記は本文に合算してある。

表1 嘉靖本

	本文	注	合計
詩+「至今」	0	3	3
詩+その他	0	3	3
合計	0	6	6

表2 『史伝』

	本文	注	合計
詩+「至今」	4	0	4
詩+その他	0	0	0
合計	4	0	4

表3 嘉靖本

	本文	注	合計
「至今」+詩	1	1	2
その他+詩	0	0	0
合計	1	1	2

表4 『史伝』

	本文	注	合計
「至今」+詩	1	1	2
その他+詩	3	0	3
合計	4	1	5

この表を見れば分かるように、ここでも嘉靖本と『史伝』の間で注と本文と対立が見られる。「至今」文+詩のとき、それぞれに一例ずつ例外があるが、その他はみな、嘉靖本は注であり、『史伝』は本文もしくは低記である（低記は詩の後のみにあらわれる）。

嘉靖本には「至今」文に関連した、次のようなおかしな注がある（19-2a、1141）。

11a 名曰：“饅頭”【傳至今日出《事物紀原》】

11b 爲言：“饅頭”傳至今日【出《事物紀原》】

これは『史伝』のように「出《事物紀原》」と出典のみを注にする方が正しい。ここは嘉靖本が「至今」の文字に引きずられて注にすべきでない「傳至今日」まで注にしてしまった箇所であり、「至今」文も嘉靖本が本文から注に移している一つの証拠となる。

また位置に注目してみると、「至今」文は必ず詩の後に、「至今」文以外を詩の前に置くが、嘉靖本は、そのような振り分けをしていない。

嘉靖本には「至今」文以外のものを詩の後に置いた例が三つあるが、『史伝』ではこの全てが詩の前に移動している。次に示すのはそのうちの一例 (14-31a、798)。

12a 這一陣得江南小兒皆怕、聞張遼大名不敢夜啼。有詩曰：

……

夜静更闌不敢啼【蒙求有張遼止啼】

12b 這一陣殺到江南小兒亦怕張遼之名、遂不敢夜啼。蒙求有張遼止啼之語云

……

夜静更闌不敢啼。

また嘉靖本では、詩の前に「至今」文を置いたものが一例あるが、『史伝』ではこれが「直到如今」になり、「至今」文ではなくなっている (17-33b、1024)。

13a 吳王葬之、立廟祭祀。【至今富池口有甘寧廟、……乃是神人感應也】後人有廟贊詩曰

13b 土人葬之。吳王特與立廟。直到如今富池口有甘興霸廟、……是神之靈也。後人有詩

次に、「此～」文は、直前に語られていた話や詩についての、感想や説明などを述べる。

ここでも詩と連用するときは嘉靖本と『史伝』の間に注と本文の対立が見られる。詩+「此～」文となっている箇所は嘉靖本に五例、『史伝』に六例ある。嘉靖本は全て注、『史伝』は本文三例、低記三例で注はない。なお『史伝』の本文のうち一例は「此～」文の後すぐ改行している。これは低記にするつもりで、文頭の一字下げを忘れた例であるかも知れない。

この他に詩ではないが類似の例として二句+「此～」文、詔+「此～」文が各一例あり、嘉靖本は全て注、『史伝』は低記である。

『史伝』に詩+「此～」文が一例多いのは次の箇所 (4-70b、311)。嘉靖本では該当する文は詩の前にあるが「此～」文ではない。

14a 又嘆陳宮不識人、忠義之氣凜然千古。

其詩曰

不識遊魚不識龍

……

14b 又詩曰

不辨遊魚不識龍

……

此言陳宮雖不識人、忠義之心凜然千古。

嘉靖本の注にはなお「此～」文単独が十一例ある。『史伝』はこのうち六例が本文、五例が注であるが、本文と注を分かつ基準は明瞭ではない。

また嘉靖本にも「此～」文を本文にしている例が一つある（10-27b、532）。

15a 除庶辭了曹操、與臧霸便行。此便是龐統救徐庶。後有詩曰

15b 除庶辭了曹操、帶了臧霸便行。此便是龐統救徐庶之計也。後有詩為證  
この例の「此便是龐統救徐庶」は、落ち着きが悪い<sup>13)</sup>。あるいはもう少し手を入れるつもりが中途半端に終わったのかもしれない。

#### 4 境界線の引き方

ここまでの検討の結果から見て、注と本文の境界線は、『史伝』の方が本来の姿に近く、嘉靖本が本文を注に移すという編集作業を行っていることはほぼ間違いない。

ではなぜ嘉靖本は「原来」文以下の四種の文型を注に移そうとしたのであろうか。

これらに共通するのは、語り手による説明ということである。嘉靖本は説明文を好まなかったらしく、この他に魯肅が孫權に諸葛孔明を引き合わせた際の心理、「魯肅聽了暗血叫苦。劫將糞付的話不依」（9-47b、476）、「肅又暗暗的叫苦」（9-48a、478）も、我々から見ると本文でもかまわないと思われるが、これも語り手による心理の説明ということらしく、嘉靖本では注になっている（『史伝』は本文）。

語り手による説明は、話の進行を中断し、時間を遡ったり未来を先取りして述べるものである。これらを本文から排除すれば、本文は出来事を発生順に記述する文章に近づく。おそらく嘉靖本は、そのような本文、つまり文字通りの編年体を理想とし、可能な限り本文から説明文を取り除こうとしていたと考えられる<sup>14)</sup>。

一方『史伝』も、「至今」文と「此～」文の用法を見ても、詩と連用されるときは、必ず詩の後に置き、半数以上が低記になっている。一般的によく整えられているのは手を加えた結果であることが多いから、『史伝』はこれらの文型を注にはしなかったが、位置を移動させ、詩+「至今」・「此～」文の低

記と言う形式を作ると言う嘉靖本とは別の編集作業を行っていた可能性が高いと思われる。

### III 定型化とそれ以前

嘉靖本も『史伝』も、本文・割注・低記（嘉靖本でも韻文などは低記される）という三つの形式によって構成されている。前節ではこれを前提にして、両者では三つの形式に割り当てられている機能が異なることを問題にしてきた。

嘉靖本と『史伝』を注意して見るてみると、両者とも形式と機能分担に若干の乱れがある。『史伝』には、他の箇所なら注となっているはずのものが前後を「○」で区切ると言う別の形式を採用している例が二つある（1-54a、64及び1-65a、75）。嘉靖本では前者は低記、後者は注となっている。前者は、「史官論曰」で始まる論評であるが、嘉靖本は他の箇所では、このようなものを短ければ注、長ければ「論曰」で始まる低記、または「後史官評……曰」までを本文として論評のみを低記とするなど後の箇所でも形式が一定しない。また嘉靖本には、朱子の詩を注に入れて引用した箇所（1-7a）が一例ある<sup>15)</sup>。他の箇所では詩は皆低記であり注に入れた例はない。

嘉靖本と『史伝』の混乱は、ほとんどが作品の初めに集中している。これは両者が、『三国志演義』にふさわしい形式の選択と機能分担をみずからの手で定めつつある、つまりまさに定型化の工夫をしている最中だったためにおこった混乱であると思われる。

参考として『三国志演義』以外の口承文芸から出た読み物が、どのような形式を採用し機能を分担させているかを見てみると、次のように作品毎に異なり、嘉靖本や『史伝』と一致もしない。

成化年間（1465-87）刊行の『説唱詞話』では、白抜き「説」、「唱」、「白」を置きその前後一字分の空白をとって区別している。至治年間（1321-23）の『全相平話』でも前後一字分の空白をとり、白抜き「詩曰」とするのが普通。平話では、「関公千里独行」のような見出しや、「斉、燕」と言った国名も白抜きにすることがあるがこちらは空白無し。行換えをして韻文と散文を区別しているのは『前漢書続集』のみである。このほかに『春秋後集』は段落の初めを「○」で区切る試みが冒頭部分でなされているが、これなどは「○」を切れ目を示すために使ったという点では『史伝』と類似した用法といえるかもしれない。

我々は嘉靖本や『史伝』或いはその他の『三国志演義』の版本を知っている

ので、両者の形態を当たり前のことと考えるが、嘉靖本や『史伝』を刊行した人物の前には、嘉靖本も『史伝』も無い。我々も、あらためて両者と同じ状態に、つまり嘉靖本や『史伝』の形態が当然ではない状態に身を置いて考えてみる必要があるのではないだろうか。

#### 注

- 1) テキストは『三国志通俗演義』新文豊出版公司影印本(1979)を使用し、引用の際は、嘉靖本の巻数、葉数、表(a)裏(b)で示し、2-1a(2巻1葉表)のように表記する。
- 2) 金文京『『三国演義』版本試探』、『集刊東洋学』61(1989)43-64所収、及び岡兆新<日本《三国演義》考>、『三国演義考評』北京大学出版社(1990)109-307所収。
- 3) テキストは、井上泰山編『三国志演義史伝』関西大学出版部(1998)を使用し、引用の際は、同書の頁数を示す。
- 4) 《三国演義版本考》上海古籍出版社(1996)
- 5) 魏氏前掲書75
- 6) 『史伝』がよいテキストでないことは、井上氏前掲書の解説(1406-07)に具体的な指摘がある。
- 7) 『史伝』の欠巻に同様の例がもう一例ある。それは、関羽が顔良を討ち取る場面(嘉靖本5-66b)であるが、ここでも『史伝』と同系統の双峯堂本(5-6a)は位置が嘉靖本の「原来」文の位置より後にある。
- 8) 『史伝』は巻3と巻10が欠巻なので、この数は嘉靖本の該当箇所(5-51a~8-13bと22-36b~24-73b)の注は計算から除いてある。なお、『史伝』の欠巻部分について、同系統の双峯堂本、喬山堂本を見ても嘉靖本が注にしている「原来」文は、本文になっている。
- 9) 実は「原来」文の前後で内容が重複すると言う現象は、よく見れば後に引用する他の二例でもおこっている。3bの「只有二十騎隨着」と「張飛引二十騎」、4bの「當先一人飛轉而來」と「飛當先而來」、みな重複である。  
『三国志演義』では、話の中断とその前後での内容の重複と言う現象は珍しいものではない。「原来」文よりも大がかりで頻繁に見かけるものとしては、各章節の始めと終わりの部分あげられる。この場合も、各章節は話を中断させて、「いったい如何なりましょうや」と次への興味をつなげて終わり、次の章節で、もう一度前の章節の内容を簡単にのべ直してから話を続ける。
- 10) この箇所嘉靖本の系統の版本は、4aの文章を受け継いでいるが、嘉靖本の系統の版本に基づいたはずの毛宗崗本は、4bに戻している。これは恐らく、4aよりも4bのほうが本文として優れていると考えたからであろう。
- 11) 他の二例は、曹操の見た夢が、後に司馬氏父子の専横を予告すると言う注と(16-41b、957)、公明の遺言通り魏は陰平から侵入し蜀を滅ぼしたと言う注(21-55b、

1322) である。

12) 廖立の話に移したのは嘉靖本の方であることは、魏氏前掲書(87)。

13) この箇所も、毛宗崗本は14bの本文と同じに改めている。

14) 出来事を発生順に述べようとする態度は、筆者がかつて論じた「范鯁兒雙鏡重圓」のものによく似ている。『「范鯁兒雙鏡重圓」の創作方法』『中国文化』1993 19-20

15) 『史伝』の該当箇所(21)にはこれに対応する文がない。(筑波大学)